

孤独死の早期発見を目指すには ～つくば市山木を手がかりにして～ F.Y<福祉・国際異文化・政治経済ゼミ②>

1. はじめに

1.1 孤独死の問題点

超高齢社会である日本では独居高齢者の数が増えているが、様々な社会構造の変化により、近所付き合いは昔に比べると希薄になってきている。これら2つの現代社会の傾向は高齢者の孤独死を増やしている、と世間では認識されている。

孤独死が放置されることで遺体の腐敗が起これ、それにより建造物が汚染される[1]。金涌（2018）はこれの処理費用が高齢者への住宅の貸出に対するネガティブな感覚に繋がる、と述べた。また、孤独死が発見された地域の住民への精神的ダメージや、遺族への影響、死後長期間放置された死者本人の尊厳も、孤独死が引き起こす影響の大きなものだ。（吉田 2010） 長期間放置された遺体の発見者にもトラウマが生じる。

1.2 本探Qの目的

これらの長期間発見されなかった孤独死による負の影響を最小限にするためには、「死亡時に誰かが立ち会う」または「死亡後早期に発見をする」の二種類のアプローチが考えられる。本探Qでは、後者を達成するために必要な取り組みを明らかにすることを目的とし[2]、高齢者の生活のどのような点において死後の発見が遅れるリスクを持っているのかを明らかにする。特に調査対象の高齢者の生活背景に目を向けることで、似ている、または反対の特徴を持つ地域にも下記で紹介するアンケート調査からの考察を活かせるだろう。

2. 先行研究・仮説

2.1 先行研究の紹介

死後の発見遅延のリスクについて、実際に孤独死を迎えた人がどのような生活をしていたのか、どのように発見されたのかに目を向けることで仮説を立てる。

上田ら（2010）が行った孤独死に関連する文献からの検討により、孤独死は男性、前期高齢者、独居歴10年未満、親族が無い、交流が全くない、居住年数が5年未満（3年未満）、近隣との交流が全くない、不慮の死、突然死、緊急措置がない、自宅と関連があることが判明した。

また、森田ら（2015）の調査により、独居高齢者が死亡してから発見されるまでの時間は平均4.36日と、高齢者平均の2.45日に比べて長い事が判明した。独居高齢者に注目し、死後発見までの時間を発見契機別に比較すると、家族や介護者の訪問や会社からの連絡は、異臭や溜まった新聞などよりも発見が早いことがわかる。この結果から人との関わりが発見契機であることが発見までの時間の短縮につながると考える。

先行研究から、孤独死の発見が遅れる最も大きな原因は、「人との交流機会が少ないことである」と仮定する。

2.2 つくば市山木について

山木とはつくば市北部の筑波地区に位置する人口300人程度の集落である[3]。実際に山木に住む筆者の経験から、①昔から山木に家がある、②その家で育った人の配偶者・子供など、が山木に住む人のほとんどを占めている。特に①の人々は農地を山木に持っていることが多い。また、山木には区会があり、地域住民でのゴミ拾いや集まりが年に数回ある。

2.3 仮説

孤独死の発見が遅れる1番の原因は、人と交流する機会が少ないことである。つくば市山木に住む高齢者は区会の活動頻度が低く、日常的な住民との交流頻度が低い傾向にあるため、死後の発見が遅れるリスクがある。

3. 調査結果

高齢者の生活状況

山木に住む高齢者10名（男性4名女性6名）へアンケート及びアンケート回収時の聞き取り調査を行った。なお、対象者は全員親族がおり、独居はしていない。平均年齢は77.3歳であった。

表1 アンケート結果抜粋

親族との交流頻度	月1,2回以上：9人
近隣住民との交流頻度	週1回以上：8人
居住年数	平均51.5年(最短38年)

表2 日々行っている近隣住民の見守り等に関する聞き取り調査結果抜粋

近所の家の電気がつかを確認
散歩中などに最近見かけない人の情報交換(立ち話)

4. 考察

4.1 山木の特徴

仮説とは異なり、山木の高齢者は交流頻度が高いことが明らかになった。交流頻度の高さには、山木が持つ2つの特徴が関わっていると考えた。

①昔からある集落

山木に住む高齢者の居住年数は長い傾向にある。これによる山木の区会や近隣住民との長年の関わりが、高頻度の交流や表2に見られる自然な見守りを無意識のうちに作り出せると考えられる。

②地区内での活動

地区内に農地を持ち、軽トラックやトラクターで地区内を移動する高齢者をよく見かける。その移動中に鉢合わせた他の高齢者との雑談風景も見かけることがある。こういった農業や散歩など、地区内で活動する人が多いために、地区内での交流機会が増え、交流頻度が高くなりやすいと考えられる。

4.2 山木と異なる特徴の集落

これらの特徴を、山木と反対の特徴を持つ集落の考察に発展させる。

①'新しくできた集落

移住者の多い地域やニュータウン、マンションなど比較的新しい集落では住民間の交流が構築されていない可能性が高い。住民が互いに見守り合える関係を築くための取り組みの必要性がある。

②'地区外での交流だけの活発化

地区内での交流では散歩や家の明かりの確認などで、高頻度の安否確認が可能だ。では職場や遠方の友人、家族など地区外の交流が主である場合はどうだろうか。SNS等の普及により連絡自体は容易に行うことができるが、高頻度の安否確認は、その意識を本人と地区外の交流相手の双方が保つ必要があるだろう。

5. おわりに

5.1 結論

昔からある集落と比較的新しい集落など、地域の特色によって異なる目的を立てた対策が必要だ。人との繋がりから孤独死の早期発見を目指す場合、前者の目的は人との繋がりを作る、ではなく生活の中に見守りを組み込む意識を持たせることの方が良い。後者の場合、まず住民同士が繋がることを目的とした仕組みを作る必要があるだろう。

5.2 今後の課題

見守りが特に必要と考えられる独居高齢者を対象とする調査を行いたい。

謝辞

本探求においてアンケートにご協力くださった皆さまを始め、ご協力いただいたすべての方々に深く感謝いたします。

註

[1]孤独死対策委員会（2022）によると、遺体などの残置物処理と室内の原状回復の費用は平均616,950円(最大6,328,435円)であった。

[2]前者は24時間誰かが死に際の人間の傍にしていなければならない非現実的であり、かつ不慮の死などに対応できない。

[3]つくば市（2022）「統計つくば令和二年度版」によると山木の人口は303人である。

<https://www.city.tsukuba.lg.jp/material/files/grop/21/toukeitsukuba2022.pdf>

（最終閲覧日 2024年2月7日）

参考文献

上田智子、上原英正、加藤佳子、志水咲子、伊藤和子、森扶由彦、木下寿恵、藤原秀子、川角真弓（健康福祉学科）（2010）「孤独死（孤立死）の定義と関連する要因の検証及び思想的考究と今後の課題」名古屋経営短期大学紀要 109-131

金涌 佳雅（2018）「孤立（孤独）死とその実態」日本医科大学医会誌 第14巻 第3号 100-112

日本少額短期保険協会 孤独死対策委員会（2022）「第7回孤独死現状レポート」

https://www.shougakutanki.jp/general/info/kodokushi/news/kodokusiReport_7th.pdf

（最終閲覧日 2024年1月24日）

森田沙斗武、西克治、古川智之、一杉正仁（2015）「高齢者孤立死の現状と背景についての検討」日本交通科学学会誌 第15巻 第3号 38-43

吉田太一（2010）「孤立死,あなたは大丈夫ですか？」168-185 扶桑社